

〔論 説〕

コトバの変移（1）

—現代日本語管見—

戸 村 幸 一

目 次

1 はじめに	3 生まれてくるコトバ
1-1 現代史的時間内での変移	3-1 発音の変移
1-2 世代の累積による変移	[以上, 今回; 以下, 次回]
1-3 「乱れ」と変移	3-2 語彙の変移
2 消えてゆくコトバ	3-3 語義の変移
2-1 小津作品に見るその時代の日本語	3-4 語法の変移
2-2 1960年頃の学生語	3-5 表記の変移
2-3 現代の若者から見た古風な表現	4 おわりに
	参考引用文献一覧

1 はじめに

人がこの世に生きているとは、言語生活を送っているということでもある。そうして永い年月コトバを使っていれば、誰でもそのコトバの変化・変遷・推移を実感することになるだろう。

さて、世の中が変わった・変わってしまった、とか、コトバが変わった・変わってしまった、とか、人はよく言う。ところで、コトバが変わるとは、人間が変わることだし、人間が変わるとは、世の中が変わることだ。そしてまた、世の中が変わるとは、コトバが変わることでもある。当然、みな連関している。

〇〇が変わる、とまるで他人事のように言う。そして、自分がそこに参画していることに、人は気づかない、あるいは、気づこうとはしない。

前の世代とは違った者になろうとして自分を変えるためには、いろいろな手段があるが、コトバを変えるのもそのひとつである。コトバを変えるから、前の世代とは違った者に、自分を変えることができるのである。自分を変え、コトバを変えるのは、世の中を変えることでもある。これが「参画している」ということである。

時の流れの中でコトバが必然的に負う「変化・変遷・推移」を本稿では「変移」と一括する。そして、遡っても今からわずか数十年前までの日本語の歴史と、今日の前に展開している日本語の姿を見ることにする。本稿で扱う日本語の資料は、ほとんど、私の身辺からのウォッチングである。まさに「管見」である。

1-1 現代史的時間内での変移

わずか数十年ほどとは、私の生きてきた時間のことである。

さて、私の最初の強烈な言語体験は、戦争最末期の疎開に伴うコトバ環境の変化である。我が家は仙台の街中から宮城県南部に疎開した。国民学校2年生の私は、全く異質の方言の中に放り出された。私は就学前にもその地へ何度も行っていた。だが今度は、マチではなくムラだからこそ、年上年下の者たちとの、日常の、しかも長期にわたる協同の生活があった。そして何よりも強烈な衝撃は、担任の若い女の先生が土地の人と同じコトバを教室で使っていることだった。今までとはまるで違う。そして、戦争が終り、1年半ほどして、私はまた前の学校に戻った。

なお、敗戦を境になされた、先生たち・大人たちの変身・転身については、ここでは触れないことにする。これも広い意味でのコトバの変移だが。

この疎開先でのコトバ体験に比べればスケールはぐんと小さいが、もうひとつ記す。小学校4年生の時、東京からAT君が転校してきた。彼のそのコトバは我々のとはずいぶん違うものだった。後に、夏目漱石(1867〔慶応3〕-1916〔大正5〕年)の『彼岸過迄』(1912〔明治45〕年)で、東京のコトバは「無暗に角度の多い金平糖のやう」という表現に出会った時(全集第十巻、p.246:更には拙著『コトバの原風景』、p.181参照)、あのAT君の発音がまず私の脳裏をよぎった。彼と私はお互いの家で遊んだりもしたが、彼は間もなくどこかへ行ってしまった。風の又三郎だった。

以上は、日常の話しコトバに関わる私の体験である。小学生の私が表記法に関して最初に意識したのは、戦後の国字改革に結びつくことだ。いずれはローマ字表記に変わるからと、ある先生が放課後我々上級生を集めて学習会を開いてくれた。私はここでのローマ字の勉強から日本語の音声や文法の構造もそれなりに知ることができた。

次に、社会状況にまつわる標語や寸言の類を少し回顧する。我々はいつも社会の流れに見合ったコトバに取り囲まれているから。

1940年代前半・昭和10年代後半の戦争中の「ぜいたくは敵だ」や「足らぬ足らぬは工夫が足らぬ」などは、戦争遂行の国策標語として下達された。そして、当時の民衆はすぐに一字の増減で「ぜいたくは素敵だ」や「足らぬ足らぬは夫が足らぬ」と応じた。

同じ頃「欲しがりません勝つまでは」というのもあった。これは商品氾濫社会の今ならさしづめ「欲しがりますゲットするまでは」となるだろう。語呂は合わないが。

かつて人類の叡知を称賛するために「必要は発明の母」と言っていたが、消費社会の今では「発明は必要の母」と言われるようになってしまった。

戦時中は「一億一心火の玉」と煽動されていたが、戦争に負けると「一億総懺悔」になった。1953〔昭和28〕年にテレビ放送が始まったが、早くも、1956年にはその悪影響が憂慮されて「一億総白痴化」と言われた。まことに、一億が右往左往させられる。

次には、私の幼児期から今に至る折々の、語彙の衰亡と生誕を一瞥する。とは言え、無限にある語彙の中からほんの一部を抜き出すだけだ。生活に入ってきたモノとコト、生活から消えたモノとコト、今なお生活の中で活躍中のモノとコトのいくつかである。それらのことからだけでも、多くのことを知ることができる。

＜召集令状・防空壕・灯火管制・竹槍訓練・学徒出陣・勤労奉仕・代用食・闇市・筍生活・新憲法・洗濯板・電気洗濯機・民放・テレビ・団地・新幹線・在来線・養老院・老人ホーム・環境問題・CD・ボランティア・パソコン・NPO・DNA・介護保険・

地球温暖化>など、いろいろあげられる。

『新語・流行語大全 1945 → 2005 ことばの戦後史』という本はその名のとおり、新語・流行語のオンパレードである。その中からほんの一握りの語彙をあげてみる。

「カストリ」(1946〔昭和21〕年)や「真知子巻き」(1953年)や「ゲバ棒」(1968年)などのように、今ではまったく消えてしまった語もあれば、片や「共同募金」(1947年)や「ノルマ」(1948年)や「歩行者天国」(1970年)や「嫌煙権」(1978年)などのように、ずっと生き続けている語もある。生まれて30年を優に越す「歩行者天国」は「ホコテン」という略語を生み出したし、間もなく30年になる「嫌煙権」からは「嫌○権」という新語を造ることもできる。

「親指族」というと、親指でケータイメールを打っているのを連想するだろうし、そういうふうに使われもするが、半世紀以上昔の1951年には、パチンコの方で使われたそう。携帯電話のメールに関してこの「親指族」が使われだした時、昔同じ語が存在したことに気づいた人がどれだけいたのだろうか？

1-2 世代の累積による変移

一世代を30年として、自分の世代を70歳前後、1937年前後の生まれとすると――

親の世代は 100歳前後 1907年前後生、祖父母の世代は 130歳前後 1877年前後生、
子の世代は 40歳前後 1967年前後生、孫の世代は 10歳前後 1997年前後生、
となる。この5世代で、すでに120年の開きがある。120年と言えば、コトバの歴史に十分に有意義な年数であろう。

一方で、今から〇〇年前の自分の先祖の日本語を想像してみる。例えば、300年遡ると10代前の先祖にたどり着く。頃は寛永の末だ。10代前には、自分の先祖は1024人いたはずだ。それだけの数がいたというのなら、その人たちの間に、それぞれの地域方言や社会方言の差異が原因で、まるで違うコトバを話していた人たちの存在したことも十分に考えられる。対話の不成立がありえたかもしれない。同じようにして、時間を逆に未来へ向ければ、これから10世代先の変貌の可能性も十分に察知できる。

日本の古典文学を鑑賞する時に、現代日本語で発音して、それを普通は当然と思っている。自分の日常の日本語音を使うのだから、当然と言えば当然だ。だが、異常と言えば異常だ。古典の作者は自分の生きた時代の音を発音していたのだから。

かつて金田一春彦(1913〔大正2〕-2004〔平成16〕年)が『源氏物語』の音を復元して、それを俳優の関弘子(1929〔昭和4〕-)が忠実に朗読し録音したことがあった。それはあくまでもひとつの試みではあるが、現代日本語とは異なる、中世日本語の音とみなされる音を我々は聞くことができた。それを聞いての我々の驚きは、光源氏たちが我々の今の日本語を聞いて感じる驚きと同じである。

そしてさらに、万葉の時代にはまた別の母音や子音があった。

だが、今日現在、『万葉集』や『源氏物語』を鑑賞する時に、そんなことを念頭に置かないのがほとんどの人の常だろう。さて、当時の発音とは別の現代音での鑑賞は、必ずしも好ましい結果につながらないことにもなるのは当然だろう。

1-3 「乱れ」と変移

「いま日本語は乱れているか？」の類の質問はよくあることだが、2001〔平成13〕年1月の文化庁が行なったその種の調査「言葉遣いが乱れていると感じるか」という全般的な質問に対しても、「乱れている」という回答が、89%あった（文化庁『平成12年度国語に関する世論調査』、p.8）。『朝日新聞』の同様の調査では、「乱れている」という回答が、91%あった（2005年12月10日）。

ところで、年配者は「若者のコトバは乱れている」と言いがちだが、その年配者の一世代前の、つまり自分の親のコトバもまた子、つまりその年配者自身のコトバとは違ってははずだ。年配者と年少者のこの関係は常にある。「乱れている」とは、「いつでも、変化・変遷・推移している」つまり「変移している」ということだ。

年長者は、年少者のコトバが規範から逸脱している・理解できないと嘆き、そして、年少者は、年長者のコトバは古い・時代の流れに則していない、と片づけてしまいがちだ。お互いがそれぞれ相手のコトバを理解しようとしなくて、孤立しがちなのだ。

ところで、自分が習得したコトバだけを尊重する、という立場の人がいる。言語純正主義者（purist）である。新しいものを拒否する・認めないのである。

一方には、コトバは時の流れと共に変わって行くのだということを認める立場の人がいる。言語寛容主義者（laxist）である。この立場の人は、新しいコトバを認めるだけでなく、過去のコトバも尊重する。なぜなら、変わるという普遍的なことを認めるのであって、目先の新しいものをだけ追い求めるのではないから。

2 消えてゆくコトバ

2-1 小津作品に見るその時代の日本語

井上和男編『小津安次郎全集』は、全部で1300ページを越す大部なもので、上下2巻に分かれている。その上巻は小津安次郎（1903〔明治36〕-63〔昭和38〕年）の戦前の、そして下巻は戦後の映画作品の脚本である。どちらからも、台本が書かれ、映画が撮影されたそれぞれの時代の日本語の姿を見ることができ、ここでは下巻のうち、『晩春』（1949年）から監督の遺作『秋刀魚の味』（1962年）までの大方の作品から、今ではほとんど使われなくなった表現をいくつか抜き出してみよう。

幸いにして、この見事な脚本の全集があり、そしてビデオがある。目で読むだけでなく、登場人物の発音を耳から聞くこともできる。なお、シナリオを読んだ時と映画で役者が発音するのを聞いた時とでは、そのコトバから受ける印象がだいぶ違うことがある。これは当然のことだ。

まず借用した作品のリストを年代順に掲げておく。

『晩春』1949〔昭和24〕年・『麦秋』1951年・『東京物語』1953年・『早春』1956年・『東京暮色』1957年・『彼岸花』1958年・『お早よう』1959年・『秋日和』1960年・『秋刀魚の味』1962〔同37〕年

さてまず何よりも、小津作品と言え、次の例から入るべきだろう。

○「嫁を貰う（取る）；嫁に行く（なる）」『秋刀魚の味』

小津作品には若い女性の縁談をテーマにしたものがいくつかある。「結婚」に関するこれらの表現は『晩春』・『麦秋』・『東京物語』・『秋日和』などにも頻出する。もちろん「結婚する」それ自身も登場する。

○「片づく」『麦秋』；「片づける」『東京暮色』

上の「嫁を貰う」からここまで、現在では全く使用されなくなった、というほどでもないが、それにしても、今これらの表現をする状況や年齢層などはかなり限られてきているだろう。我々の年代でも、自分自身に関することとして、以上の語をどれだけの人が使ったろうか？ なお「嫁（枕）く」や「嫁（と）ぐ」はなかったようだ。

○「——お父さんはもう五十六だ。お父さんの人生はもう終りに近いんだよ。だけどお前たちはこれからだ」『晩春』

年齢に関する表現も、今とはまるで違うものがいろいろ出てくる。ここでは、父の曾宮周吉（笠智衆）が娘紀子（原節子）に語っている。「人生わずか五十年」という認識がまだ尾を引いている時代の感懐である。次も同類の発想である。

○「訪ねて来た〔平山〕周吉（笠智衆）が旧友の服部修（68）（十朱久雄），その老妻よね（60）（長岡輝子）と懐かしげに語り合っている」『東京物語』

これはト書きだ。上の「人生わずか五十年」にも関係するが、60歳のつれあいを「老妻」と昔は確かに言った。上の「五十六だ／終りに近い」もこちらの「60歳で老妻」も、寿命の伸びた今では、全然そぐわない表現、あの時代を彷彿とさせる表現である。

ところで、「老妻」に対し「老夫」とは、まず言わない。老いた男性一般には使いうるが。「愚妻」はあるが「愚夫」はない。反意語の成立しない、性差別の語だ。

○「…ま、奥さんに悪しからずな」『東京暮色』

杉山周吉（笠智衆）の娘明子（有馬稲子）が墮胎費用を父の友人関口積（山村聰）の妻（登場せず）から借りたのに対し、杉山が関口に言う。「悪しからず御承知おき下さい」などを我々の上の世代はよく使ったように思う。もちろん、私にも経験はある。

なお、有馬稲子は最近あるラジオ番組でこの映画の出来をあらためて評価していた。

○「（…）うたた感慨に堪えなかったのであります。（…）大いに羨望の念を禁じ得ないものがあるのであります」『彼岸花』

中学時代からの親友の娘の結婚披露宴でスピーチする平山渉（佐分利信）のその語り口は、セレモニーに緊張してという以上に、旧制時代に学生生活を送ったふうな口ぶりである。私には、これらの表現を上世代の人たちから聞いた記憶がある。だが、あまりにも古風で私には使えない。

○「給仕！ お茶！」『麦秋』

丸ビルの一画に構えている会社の専務佐竹宗太郎（佐野周二）の台詞である。上下関係・男女関係がまだまだ旧弊な雰囲気のある時代の職場である。これがト書きでは「女給仕」となる。「小使・女中」などの職名・肩書も急速に廃止された。なお、飲食店などの若い女店員は、これら脚本のト書きなどでは「小女」と書かれるのが普通だ。今では、「ウェイトレス」から「スタッフ」になっている。

○「大体お前たち、なんだ！ いつまでも一つことグツグツ、女の腐ったみたいに！ 子供のくせに余計なこと言いすぎる！（…）男の子はペチャクチャ余計なこと喋るんじゃない！」『お早よう』

これは、テレビを買ってくれ、とねだる2人の子供に対して、中流月給取りの父親林敬太郎（笠智衆）のコトバ。男尊女卑・幼少侮蔑の厳然たる存在。ついでながら言えば、男コトバと女コトバの性差の消滅も、また、大人と子供のそれぞれの相手への対し方の変移も、社会全体のいろいろな変貌に則するのは当然だ。

なお、この映画では、数軒のサラリーマン家庭がああ時代らしい安普請の木造住宅で隣り合っている。その女房たちの対話が、まさにあの頃の生活の匂いだ。先に、読んだ場合と聞いた場合に差がありうることに触れたが、ここはその好例である。

○「芋五・六貫目」『晩春』；「肉百匁」『早春』

これらの表現が発せられた時、まだ尺貫法そのものは健在であった。メートル法の実施は『早春』が完成した3年後1959年1月のことである。もちろん日常の意識では、施行後も一遍に切り換えられたわけではない。例えば、施行10年後の1969年でも、山田洋次（1931〔昭和6〕-）は、そのシリーズ第1作となる『男はつらいよ』で車寅次郎に「一貫目ほどやせた」と言わせている（『男はつらいよ』第1巻，p.84）。因みにこのシリーズのテーマソングには「日方で男が売れるなら」とある。

なお、上の芋や肉に関して今同じことを言おうとしたら、「芋20キログラム前後」とか「肉400グラム弱」とかになるだろう。

○「支那ソバ屋・支那料理屋・支那鍋」『早春』；「チャンソバ屋」『東京暮色』

「ラーメン」という語も使っているが、古い表現が十分にまかり通っていた。「支那」は今では差別用語ということで、私が今使っているこのパソコンでも出ない。

私はかつて、後述の「2-3 現代の若者から見た古風な表現」に記すような調査をした。その中で「おじいさんが<支那>という語を使うが、今は使用禁止のコトバだ」と学生HK (m.) が回答している。ついでに記すが、年長者で相変わらず「バカでもチョンでも」や「かたわ・びっこ」などの差別語を使う人がいて世代の差を感じる、とSA (f.) は書いている。また、50歳位の男性が使った「バカチョン」に対し「今は使ってはいけない単語だ」とBI (m.) も記す。差別表現を忌避しようという感覚に若い彼らは敏感だ。

○「上野の停車場」『麦秋』

これは、石川啄木（1886〔明治19〕-1912〔同45〕年）がくふるさとの訛なつかし停車場の人ごみの中にそを聴きにゆく>（『一握の砂』，1910年）と歌った時代の延長上のものだ。『日本国語大辞典』（第二版）は「停車場」の項の語誌欄に「昭和になると駅が一般的となる」と記す。この映画は1951〔昭和26〕年の作品で、この台詞を語る間宮たみ（杉村春子）は54歳と指定されている。ということは、彼女は1897年前後の生まれ、啄木より10歳ほど若いだけである。身につけてしまった語を今も保持しているということだろう。

○「シャボン」『晩春』・『東京物語』・『秋刀魚の味』；「シャボン箱」『早春』

「シャボン」はポルトガル語かフランス語から到来の可能性もあるが、『日本国語大辞典』（第二版）によれば、スペイン語の jabón に由来するらしく、16世紀末の南蛮貿易で伝来したとのこと。学生に確かめてみると「シャボン玉」という語は分かるが、そのもとの「シャボン」が何であるかは分からない。

○「アノ、蠅帳（はいちょう）に這入ってます、コロッケ…」『麦秋』

間宮史子（三宅邦子）が、夜遅く帰宅した義妹の紀子（原節子）に夕食がすんだかどうかをたずねながらの台詞である。

上の「シャボン」は「せっけん」と言いかえれば、今の若者にも分かってもらえるものだ。語は無くなっても、モノは健在である。だが、こちらの「蠅帳」は、今日、一般の家庭ではモノが無くなってしまった。なお「はいちょう」は原典のルビである。『日本国語大辞典』（第二版）でも、「はえちょう」の見出しは、用例を出してはいるけれども、語釈は「はいちょう」に送っている。また「這入って」という表記をする人は今はいないだろう。表記の変移についても後述する。

○「史子もそのまま火鉢に向って灰文字などを書いている」『麦秋』

上の「蠅帳」の台詞に後続するト書きである。「灰文字」という語だけでは分からなくても、「火鉢に向って」という状況説明があるから、年配者・経験者には十分に理解できる。ある所で、「灰文字」とだけ示して、その意味を聞いたが、答えられる人は誰もいなかった。だが、「火鉢で」とヒントを言いかけると、途端にみんなが「ああ」と察してくれた。実体は知っているが、対応する語を知らなかったのだ。なお、この「灰文字」という語は『日本国語大辞典』（第二版）に採録されていない。

○「茂吉は耳に手屏風をして一心に見ている」『麦秋』

これもト書き。大和に住む間宮茂吉（高堂国典）は息子の周吉夫婦を訪ねて上京した。周吉（菅井一郎）と妻の志げ（東山千栄子）は父茂吉を歌舞伎座に招待した。その情景を示している。聞き耳を立てる時の、耳に手をあてがうあの動作を「手屏風」というのだ、と我々は十分に理解できる。今までこの語を知らなかったとしても、である。映画だけを見て、シナリオを読まない人はこの語には出会えない。さて、この「手屏風」という語も『日本国語大辞典』（第二版）には採録されていない。

○「驛倉鎌北」『晩春』

映画の冒頭に、横須賀線北鎌倉駅の入口が写るシーンがある。その駅名が右横書きである。右横書きは実は、縦書きだけの感覚から言えば、右からの縦書きで1字ごとに改行したものと言える。今日現在右横書きが見られるのは、昔からの名残の所で、あるいは自動車の右側に走行方向に合わせて、そんな場合に限られるだろう。

なお、「驛」と旧字体のままである。1946〔昭和21〕年に当用漢字表が内閣告示されたが、その字体表が内閣告示されたのは、この映画『晩春』が制作公開されたのと同じ1949年である。その後の印刷物でも、旧字体はまかり通っていた。新字体の活字ができるのに手間がかかった。

以上、1950年代を中心に10年を越す時間の中の小津作品からほんのわずかの表現をみてきたが、半世紀ほどを経過した今日の日本語からは消えてしまったものがほとんどだ。大方は、社会状況が変わったことを示す例である。

2-2 1960年頃の学生語

上の小津作品の末期と重なるのだが、1960〔昭和35〕年頃の学生語についてここで少し触れてみたい。60年安保の頃、学生たちはどんなコトバを使っていたのか？

以下『朝日新聞』に掲載の特集記事から、いくつか取りだし、コメントする。

○「消耗だ」=試験・宿題・ゼミナールの準備などで、相当にこたえること。まことにそうであった。なお、今なら新聞記事の中でも「ゼミ」と切断形で表現する？

○「蒸発する」=授業をサボること。「消える」とも言う。以前は「エスケープ」という語

を使ったが、次第に新語が登場している。

○「ブルってる」=「ゲルピン」の反対を表わし、珍しく金を持っていたり、派手な服を着ていると、こう言われた。「ブルジョア」の「ブル」に由来する。

以上は『朝日新聞』の1960年11月16日から。以下はその2週間後の記事から。この2回を合わせてひとつの特集である。

○「陰謀！」=善良な学生をひどい目にあわせるようなものに対して言う。勉強中に急に電灯が消えてしまった時など。例示が停電とは、今は遠い昔のことである。

○「わだつまれる」=第二次大戦に出陣した学徒兵75名の遺稿集『きけ わだつみのこえ』（1949〔昭和24〕年）にみられるような、無理やり戦争に駆りだされて死ぬこと・殺されること、またはそういう状況に追いこまれること。そしてこの箇所では、記者は、いつの時代でも、学生は不安・危機感に駆られている、とも書いている。

○「タクる」=タクシーで行く。「学生生活も楽になったなあ」とOBが嘆いたとか。

○「リツになる・ならない」=アルバイトなどで、ペイがよければ「リツになる」と言う。「能率」の「リツ」だろう。

○「ビッテン」=単位が取れない時、さらにはまた、良い成績が欲しい時、担当教授のお宅にお願いに上がる。ドイツ語の bitten である。「単位を下さい」だけではなく、「良い成績を」とも、お願い願うのである。

以上は『朝日新聞』の1960年11月30日から。ここまでは、「近ごろの学生語」と題する連載記事。そのリードでも断っているとおり、近ごろ出来立ての学生語だけではない。

最後に引いた bitten は、多分、旧制高校生たちも使っていたのではないかと。新制高校に1953〔昭和28〕年に入学の我々でさえも、旧制からの遺産として、ドイツ語から借用したいろいろな語を常用した。

次は『朝日新聞』の1962年6月18日。上の記事からまだ正味2年たっていないが、学生をとりまく状況がゆったりしてきているのが分かる。社会全体の変化に則している。

○「センエツ」=マージャンで勝ったり、試験で楽勝したり、そんな時に使う。

○「しずむ」=上の「エスケープ」や「蒸発する」や「消える」などについて、この語が登場してきた。

○「安後派」=安保闘争以後の学生を指す。

○「トロちゃん・おスタちゃん」=全学連用語で、トロツキストないしそのシンパは主流派、それに対するスターリニストは反主流派の代々木派。

○「MMK」=「もててもててこまる」の頭文字。これと類似の語法で1990年代に出来た(?)語「MK 5」〔=マジで切れる5秒前〕も今では古い表現のようだ。

○「PHD」=女子大生は「あなたPHDよ。お気をつけあそばせ」などと言う。こちらは、ローマ字ではなく、Petticoat Hanging Down の頭文字。つまりは「シミズミエコさん」の類である。

今でも「お気をつけあそばせ」という表現は生きて使われているだろうが、『注意しなさい!』を意味する類似表現内での他の表現と比べたら、その出現率は極めて小さいだろう。使われるとしても、当時以上に何らかの意図を込めて表現するだろう。

以上、60年頃の学生語である。

上に掲げた語の中で、今なお使われている語はほとんどないだろう。先の連載記事に引

かれている語のうち、ただ一つ今も生きてるようにみえる「コンパ」でさえも、最近では死語になりつつある、とまでは言えなくても、この語を知らない学生がいることは確かだ。彼らはただ「飲み会」とか「懇親会」などとひねこびたことを言う。この現象は、学生が特権階級であった時代が遠くへ去ったことを示している事例でもある。

「試験」という語を捨てて「テスト」と言い、「大学祭」や「学祭」が「文化祭」と中高生並になり、自分たちを「学生」ではなく「生徒」としか言わない学生が多くなった現代のキャンパスとの違いが上の引例には見られる。「最高学府に学ぶ我々は」などとアジっていたのは今や夢の中。大学数も学生数も増えに増えた。

2-3 現代の若者から見た古風な表現

さてここで、今の若者が実際に体験した古風な表現を取り上げてみたい。差別表現に対する現代学生の目ということで、上にも少しすでに記してはきた。

学生に、年上の人たちの日本語で、自分たちは日常使用しない語（句）や表現、つまりは古（臭）いと思う語（句）や表現があれば記すよう頼んだ。その際、できれば、その年長者の性別、年齢、その発話のコンテクストも、また、その語（句）や表現を聞いた時、すぐ理解できたか、どんな感じがしたかなども書いてもらった。

このような問いに対する学生の回答はかなりの数になったが、ここではそのうちのほんの少しだけを記してみよう。

○「えもんかけ」と祖父（70歳）は言うが、古い感じの語だと思ったとHN (m.) は報告してきた。両親は使わないとも付記する。二世前前の語というわけだ。

さてこの語を上げる学生は多いが、「衣紋掛け」と書く学生はいない。なお「えもんかけ」を回答に上げる頻度は最近激減しつつある。高齢者も「ハンガー」を使う割合が増えているということだろう。ある着付け伝授の本でも、「衣紋掛け」ではなく「ハンガー」で通している。「衣紋掛け」に着物を掛けた写真のキャプションでは「きものハンガー」としている。読者に理解されない表現は避ける、ということだ。（笹島寿美『キモノのしたく片づけ』, p.21。著者は1937年生とのこと。）

なお、「衣桁」はモノそのものが一般の家庭からはとうに消えている。

○「CD」を「レコード」、「バイク」を「オートバイ」と祖父母（70歳代）は言う。だが「CD」というモノと「レコード」という語の間には、距離がありすぎる。「オートバイ」という表現は違和感があるが分かったとSH (m.) は書く。

これに関連するが、UK (m.) は、ある授業でスペイン文《Yo no tengo tantos discos como él.》を、「私は彼ほどたくさんCDを持っていない」とまず訳し、次いで「私は彼ほどたくさんレコードを持っていない」と訳しなおした。これは多分、discos「レコード」と discos compactos「CD」を区別しての改訳であろう。

○「DVD」を「デーブイデー」と言う年配者がいるとMH (m.)。そういう人なら「シーデー」とか「エヌテーテー」と発音するだろうとこちらが聞くと、彼はそうだと答える。

○「ヘルメット」のことを祖母（72歳）は「鉄かぶと」と言うが、ずいぶん変な言い方だとNI (f.) は回答。今の学生の使用語彙 (active vocabulary) には、確かに「鉄かぶと」という語は存在しないだろう。

年配者は現代生活の中の的確な借用語を知らないし、使えない、ということに、若者が

辟易している回答は、上の「CD」や「バイク」の場合も含めて、かなり多数みられた。年配者には古くから馴染んだ発音や語が身にしみついて、新しくは覚えられないという言語生活の生理がここにはっきり出ている。理解語彙 (passive vocabulary) の習得限界を越えてしまった、ということだろう。

○「鹿爪らしい」(50歳位 m.)。前後関係からなんとなく意味は取れた。変わった音の語だと思ったと DE (m.) が回答。「この人が同僚と仕事の話をしていて」と注をつけているから、この学生が電車の中などで小耳に挟んだという類の語かもしれない。「鹿爪」ときちんと漢字で書いているのは辞典に当たったということだろう。もっとも、辞典によっては、この当て字を紹介しないものもある。

○「しっかり勉強したまえ」。60代の男性教授が、テストの内容を発表する時に学生に向かって言った表現と KO (m.) は報告し、さらに次のようなコメントが記されてあった。「したまえ」は親しみと軽い敬意の込められた語なのだろうが、自分たちの方がずいぶん下にみられているような気がする。たいして年齢の違わない人に言われたら不愉快な気がするだろう。男性専用の表現だろう、とも付記している。

○「つれあい」(70歳前後 f.)。話からその人の夫であることは分かったが、ずいぶん古風な言い方だと思ったと KK (f.)。「主人・家内」など現行の配偶者の呼び方の方が、はるかに古風だ。「つれあい」の方が、男女全く平等・対等に使える。まさに「パートナー」だ。年配者が気軽に「つれあい」を使っていれば、状況は変わるはず。

○「はらの虫がおさまらない」。テレビのコメディドラマで男優のセリフ。虫というのはどこからきたのか、何を表現しているのか不思議に思ったと MS (m.)。回虫などが現実に腸内にいて、サントニンなどという虫下しを飲まされた世代には、その比喩用法としての「ハラノムシ」も合点がゆくが… それよりも、このような人は類似の表現にも悩まされることになるだろう。「虫酸が走る・胸騒ぎを覚える・はらが据わる・臍で茶を沸かす・尻が長い」等々。身体語彙使用の熟語の衰退が言われて久しい。

○「×月一日 (いっぴい)」(50歳前後 m.)。最初「×月いっぴい」と思ったが、話の前後関係から判断できた。「晦日払い」など分かるだろうか？

○「するやいなや」。中学で as soon as の訳語として教えられた時、ずいぶん古風な表現に訳すのだと思ったと EM (f.)。私が中学でこの表現に出会った時にも似たような感想を持ったことを思い出す。ましてや、それからずうっと後の、半世紀も隔てての中学生の感想である。まことに、漢文訓読体の語法がここでは健在である。

○「破廉恥」(50歳代 m.)。「カタカナでハレンチと書く方がよさそうなイメージの語だ」と ZM (f.) が報告するからには、読めたし意味も分かった、ということだろう。この「破廉恥」の3文字はみな、常用漢字表内のものだから、読めて当たり前だが、ただし、「カタカナで書く方が」と言っているのは、いかにもマンガ世代の文字感覚と言える。

○「むらさき」(おば55歳位)。醤油を寿司屋などでこう言うのは知っているが、家でお彼岸の煮物を作っていて、とっさのことで驚いた。古風できれいだと WS (f.)。

○「アジる」(高校英語教師60歳位 m.)。英語の授業で sabotage →サボる, agitate →アジる, など外来語からの例の中で出たが、その意味がまったく分からなかった。日本語と思えなかったと HS (m.) は言う。「サボる」は十分に分かったはずだ。

○「ちんちくりん」。母 (57歳) が洋服を試着して言った。状況から理解できた。

- 「かんらんちょうだい」(八百屋の店頭で70歳前後f)。「甘藍・キャベツ」だと、指さすことで分かったとSS (f)。「甘藍」は、もちろん辞書で調べたため。
 - 「とんじ」(75歳 m.)。「豚児」のことだと、すぐには理解できなかったとWB (m.)が回答してきたが、さて、どうやって決着がついたかについては書いてない。
 - 「みさお」(50歳位 m.)。分からなかったとNA (m.)は言うが、重々しい感じがした、と付け加えているから、前後関係で多少は見当がついたということか？
 - 「ハスに」=「ななめに」(40歳位 m.)。意味が分からずにいたら言いなおされた。
 - 「けしからん」(75歳 m.)。意味は分かるが、日常なじみの薄い語だ。
 - 「なりませぬ」(50代 m.)。手紙で。理解はできたが、かたくるしく感じられた。
 - 「夕食をこしらえる」(60歳代 f.)。自分たちは「作る」としか言わないとFM (f.)。
 - 「細君」(75歳 m.)。『吾輩は猫である』を思い出した。
 - 「すこぶる」(80歳位 m.)。我々は「超」だとMS (m.)は言うが、コンテキスト次第では「全然」も使うかもしれない。「すこぶる(超・全然)愉快だ」
 - 「舶来物・舶来上等」。祖母(80歳前後)が、学生の着ているTシャツに関して。
 - 祖父(75歳)が電話番号を調べようとして、まず「アドレス帳」を探した。今は、電話の中に登録されているとMH (m.)。
 - 「夜中口笛を吹くと蛇が出る・食べてすぐ横になると牛になる」など、戒めの表現を聞かなくなったというTY (f.)の報告もあった。
 - 少し堅い本を読んでいけば、古風な表現はいくらでも出てくる、と具体例を多数列挙したのは日本文学専攻のNS (m.)であった。
- さらにはまた、質問に答えようとして内省すると、自分たちが日常使わないから、かえって新鮮だ、という感覚があるのに気づく場合がある。非日常的なものに「新鮮な感じ」を抱くという感覚が古い語の再生の契機になる、ということは一般に言われることだ。次の指摘も、またその次の詩人の自作朗読についての感想も根は同じだ。
- 「ハイカラ」。祖母(72歳)がよく使う表現だ。若い世代が使うとウケを狙えるかもしれないとDS (f.)は言う。ただし、これを父が時々使うが、すでに失笑を買う言葉だとTH (m.)は言う。同じ世代でもこれだけの語感の差がある。IY (m.)は、70代女が言うのを聞いて何となく理解できた、昔の流行語(?)とだけ記す。
 - 60歳位の詩人の自作朗読を聞いた時のことだが、そこには多くの古語が入っているのに気づいた。アンティークな魅力を感じたと哲学専攻のSH (m.)が言う。
 - 「豪儀だ」。祖父(80歳)が、映画で海賊の追われるシーンを見て言ったが、古い表現というより、新鮮味を感じたとTT (m.)の回答。
- 例えば、次の「断腸」もこの「豪儀だ」のように新鮮な表現と感ずる場合があるとか、感ずる人もいるとか、その折々の条件が重なるだろう。単に分からないと回答するか、別様の回答にするか、状況差や個人差は多種多様に現れうるだろう。
- 「断腸の思い」(祖母70歳)。全然分からなくて意味をたずねたとON (m.)。漢語の語彙不足に関する報告は他にもいろいろある。
 - 「七輪・ちゃぶ台」など、日常使わなくても、知っているから、古臭いとは思わない、むしろ新鮮な感じだとOM (f.)は言う。
 - 「手さし(=アームカバー)」(祖父母・農業)。初めて聞いた時は古くさいと思ったが、

今では自分でもこの語を使うほどになじんできたとは FH (m.) の回答。

以上のような多種多様の回答以外にもまだまだあるが、とてもここに全部は載せきれない。確かに、今では古風と言える語もあるが、一方、学生たちの理解語彙の乏しさが見事に反映している、とも思えるのだが、どうだろうか？ 使用語彙と理解語彙の両方を含めて、所有語彙の少なさという面から、見ることも可能のようである。

ただし、この質問で求めている「あなた(たち)は日常使用しない語(句)・表現、つまりは古(臭)いと思う語(句)・表現」というのは、学生には酷な場合もあった。「日常使用しない語(句)・表現」には

- ①「ここで今使われていない」だけではなく、
- ②「よそで今使われている」も含まれているからだ。

若い学生に、つまり、言語生活の未熟な若者に、①と②の区別をしる、と言う方が無理である。それで次のような回答も見られた。2つだけ記すが、いずれも方言。

○「こわい」=「固い」の意味で、祖父母(70歳代)が使う、という回答。ただし、祖父母の居住地や出身地などは書いてない。「こわい」を「固い」の意味で使うのは、西日本と北関東以北である。これをあげる学生はかなり大勢いる。彼らは多分、南関東の出身で「怖い」の意味でしか使わないのだろう。

○「こんななりきに書きゃ読む人がわかんないぞ」と祖父(88歳)が孫の SY (m.) に注意した。(なりき「静岡方言」=雑・ぞんざい、『全国方言辞典』)

ところで、文化庁の『平成13年度国語に関する世論調査』から、10代の若者たちが理解できないし、使用しない表現の上位3語を上げると、次のとおり(pp.23-31)：

- 「つとに」は 85.1%の者が
- 「けんもほろろ」は 77.7%の者が
- 「よんどころない」は 64.5%の者が理解できないし、使用しない、と言う。

これらの語は、上の調査に対する学生からの回答には、一度も見られなかった。それは多分、日常、大人でさえもあまり使わないから、学生の耳には届かなかったのかもしれない。以下、「言わずもがな・ゆゆしき・とみに・水ももらさぬ・いたたまれない・心もとない・おもむろに」と続くが、どれも私の調査の回答には出てこなかった。

この項を終えるにあたり、一言付け加える。もしここでの質問が、学生時代の私自身になされたら、どんな回答をしたらだろうか？ すでに「2-1 小津作品に見るその時代の日本語」の中に記したような古い表現も、回答の一部になっただろう。それに関連したことをその都度そこに記しておいた。

3 生まれてくるコトバ

3-1 発音の変移

ここでは、現代日本語の発音傾向、年配者と比較して最近の若者の発音の特徴などについて述べる。まず全般的なことを記す。

若者の発音で気づくのは、次のことだ。母音も子音も総じて発音がぼやけ、口の開きがゆるくなった。間延びして、口中にこもりがちで、曖昧、早口になっている。早口というのは、テレビやラジオでのCM、アナウンサーのニュースの読み方、DJなどの語りコトバの速さ、歌手の歌唱速度などの昨今の状況を一瞥すれば分かることだ。あるベテランの

ナレーターは、1分に360字あたりが聞く者の心にしみる語りだ、と述べている。しかし、ニュースの読み上げは、もっとたくさんの字数をこなしているはずだ。

学生にまず400字程度の文を書かせて、それをゆっくり読むようにと指示しても、1分とはかからない。

以上のようなことを踏まえて、HT (f.) は、だから、他人の書いた文章をきちんと朗読しようとする、不自然な発音になりがちだし、文字表記と自分の実際の発音に落差を感じる、と言う。また、MK (m.) は、年配者に比べ自分たちの発音が画一的なのは、メディアなどの新規発音を若者たちが一斉に受容しがちで、相手にかっこよく届くように、又感情を直接に表現したいからだとも言う。いずれも説得力のある感想だ。幼い頃からマスメディアによる多種多様の影響を受け、大都市中心の発信を彼らは受信する。

次に母音・子音などの順に細かに見て行く。

3-1-1 母音の変移

〔イ〕が開いて中舌化することがある。〔ア〕の開きが足りなく、前よりになるのに伴って、〔エ〕が狭い方に移って、〔イ〕に近くなることもある。

低アクセント音節で、母音が無声子音に挟まれている時、その母音に無声化の傾向がみられる。例えば、鹿 [ʃika] の [i] や草 [kusa] の [u] など。なお、ロシア語 читать [tʃitát] 「読む」や、писать [pʲisát] 「書く」などの и [i] が、日本人の発音でははっきり発音されない、ないしは、日本人は発音したつもりでも、ロシア語の母語話者の耳には聞えないことがある。これも、上記の日本人の「鹿・草」の調音様式 (manner of articulation) と同じ条件ゆえに起こるものである。

3-1-2 子音の変移

まず、サ行の発音に異変がみられることを指摘しよう。

〔ス〕の歯茎摩擦音 [s] が前よりの歯摩擦音 [θ] に近くなる。〔デス〕が [desu] から [deθu] となり、さらには、閉音節化して [des] または [deθ] となることもある。

〔シ〕が、後部歯茎摩擦音の [ʃi] ではなく [si] に、さらには [θi] に近くなる。つまりは、フランス語の chic 「しゃれた」の冒頭音のようにではなく、英語の sick 「病気の」の冒頭音のように、さらには英語の thick 「厚い」の冒頭音に近くなるのだ。例えば「もしもし」の発音が [mofimofi] から [mosimosi] や [moθimoθi] となる。これは調音点の前方化である。英語の発音の干渉 (interference) かもしれない。

この [si] という発音の完成で、サ行音が [s+母音] すなわち [sa se so si su] に統一されるのか、あるいは [s] から [θ] の方への移行などで新たな混乱が起きるのか、いずれにしろサ行音は問題が多い。

ガ行の発音が、鼻濁音から濁音になってきている。これも、若者発音の大きな特徴である。[ŋ] が [g] で、すなわち、軟口蓋鼻音が軟口蓋破裂音で発音される傾向が強くなっている。他の有声音にもかつては鼻音が伴った、その歴史がこれで全て解消するという事であろう。今なおそれを残す方言は存在するが。

「羽衣・夕顔・高砂・葛城」などが [haŋoromo, yu:ŋao, ……] ではなく、[……, takasago, kazuragi] のように、鼻音抜きで発音されるだろう。「私の卒業論文は源氏物語

の柏木の巻でした」など、どう耳に響くようになるか？ もっとも「卒業論文」ではなく「卒論」としか言わないだろうから、これは比較のしようもないか？

なお、演劇団体所属の文学部のBK (m.) が、舞台の上からの発声で、観客が聞き苦しくないように、ガ行の発音を鼻濁音にするよう注意している、と報告している。そして、それほど「鼻濁音は遠い存在になっていると思う」とも付記している。さらには、拙著『コトバの原風景』の pp.49-50を参照のこと。ここでは、中村真一郎 (1918 [大正7] - 97 [平成9] 年) の小説『恋の泉』 (1962 [昭和37] 年) や丸谷才一 (1925-) の小説『たった一人の反乱』 (1972年) などを資料にして、鼻濁音／非鼻濁音の問題を論じた。この2作品の中ではまだ鼻濁音も健在である。

『国語学大辞典』は1980 [昭和55] 年に発行されたが、その「鼻音」の項にも、最近東京をはじめ全国的にこの傾向が出てきている旨の記述がある (p.716 ④)。

次は [m] について。[m] は、語中で、早口の場合、時には語頭でも、両唇の閉鎖なしに発音される。つまりは母音化される。そして次には脱落する。例えば [スミマセン] が [スイマセン] になるのがそれだ。この [スミマセン] も、母音の脱落が先行し、ついで、子音の異化 (dissimilation) が起こる場合は [スンマセン] となる。

ところで、小津安次郎の『一人息子』という作品で、主人公良助 (日守新一) が借金をして謝る場面がある。ここでは [スミマセン・スイマセン] の両方を混用して連発している。この映画は、1936 [昭和11] 年の作品だ。同じ小津の『早春』 (1956年) にも [スイマセン] という台詞が見られる。小津映画はシナリオどおりに役者に喋らせるとのことである。山田洋次の「男はつらいよ」シリーズ全48作の脚本中、私の披見しえた限りでは [スイマセン] という台詞しか見られない。

3-1-3 超分節音素の変移

まず、アクセントに関しては、年配者は抑揚をつけて話す、若者の発音では高低アクセントが平板になりつつある。例えば、「彼氏」が [●○○] ではなく [○○○] になる。「ニジカイ、クラブ、パーティー」なども同様である。つまり、アクセントの弱化・平板化が起こっている。実際、学生たち自身にもこの指摘は多い。ある学生は「クラブ」という語に関して、[●○○] は、おじさんたちの行く所、ぼくたちが行くのは [○○○] と発音しわけてくれた。このような変移の原因については、アクセントのある発音は、形式ばっている・あるいはかっこ悪いと感じるせいだろう、と彼らは言う。逆に言えば、これは、平板の方がかっこ良く、自分たちの身に添っている、ということだ。だから平板化は一般化してゆくのだ。

ところで、川上弘美 (1958年-) の小説にこの平板化を補強してくれる一文がある。この作品の初出は『新潮』2000年3月号である。：

「ヒトミちゃんはカレシとかいるの」中野さんに聞かれたことがある。(…)。カレシという発音が、平板な今ふうの発音だった。

(川上弘美『古道具 中野商店』, pp.15-6)

この話し手古道具屋の中野さんは中年だが、全編を通して若者ふうに喋っている。つま

り、使用人のヒトミらにあわせているようである。「カレシとか」の「とか」というのもそのひとつの現れである。

若者の発音でもうひとつ、以前とは違って耳に響くのが文節末のそれである。〔ソレデー↑、ボクガー↑〕などは、〔○○●●〕と、助詞を強めて、1音高くして、伸ばして1拍多くして、発音しがちである。一般には、この現象を「語尾を伸ばす」とのみ言うが、「伸ばす」のは「強くする」と「高くする」の結果でもある。文節末の強高伸の発音である。文節末に1モーラ加えることになるのだ。80年代の初めには出現していたようだ。1981年にすでに、俳優宇野重吉（1914〔大正3〕-88〔昭和63〕年）が最近の若者のこの発音は聞き苦しい、とテレビのインタビューで述べていた。この発音傾向と上述のガ行鼻濁音の消滅傾向とは、ほぼ同時発生のようなものである。

なおこの発音は「だらしない」という、現に発音している学生たち自身の、感想も聞かれた。そういう自覚があるからだろうか、自分はそうならないように努めているとの発言もあった。就職活動を意識した行動かもしれない。だが、このような内省も減ってきている。自分たちよりも年上の若い社会人たちの発音の中でもはや、それが普通の発音になってしまっているためかもしれない。

この発音は、1960年代末に盛んだった大学紛争・学生運動のアジ演説の影響とか、それ以前からのネサヨ運動の結果とか言われるが、定説はない。今の学生にとっては、この「アジ演説」も「ネサヨ運動」も、意味不明の語、つまりは死語である。

もうひとつの顕著な現象が「昨日？ 原宿とか？ 行って？」のような半疑問形だ。これは、1990年代中頃に出現したもので、自己疑問形とも言われたが、要は、自信がない時、照れくさい時、相手に同意を求める時などの発音だ。使用する若者自身がそう分析・説明していたが、時がたつにつれ、そのような意識もなくなり、〔ソレデー↑〕など文節末の強高伸発音とともに、日常当然の発音になってしまった。

若者の発音傾向にさらにもうひとつ付け加えることがある。「～で終わりです」とか「～を始めます」などの末尾の表現「です・ます」の部分が、直前の音よりも強めて高く、特に〔ス〕よりも〔デ・マ〕の方が強められ、高められる。場合によっては〔●●▼〕のように〔デース・マース〕と1モーラ加えて発音されることがある。

以上見てきた若者の発音傾向に対して嫌悪感を根強く抱いている年配者がいることは確かだ。しかし、世代は交代する。

これら超分節音素系の諸特徴は、使用者の加齢と共に使用人口が増え、定着していくだろう。つまりは今後の日本語の普通の現象になっていくとみなせる。

若い俳優は、当然ながら、与えられた役次第で、コトバ作りをするようだが、一方、若いアナウンサーの発音は上に述べた各項目に該当する特徴が徐々に現れてきている。

〔参考引用文献一覧は、次回に一括掲載〕

(2007.6.3)

Language change in present-day Japanese

The purpose of this paper is to describe changes in present-day Japanese: what have disappeared and what have newly appeared. I examine some features in its changing aspects: phonetics, vocabulary, semantics, syntactics and writing.

It is certain that the postwar social conditions and IT revolution have made a tremendous impact on the history of our mother tongue. However, language continues to transform itself, always, day by day. In Japanese, we can find a number of variations according to the age of speakers. The results show that the history of language is alternation of generations.

現代日本語の、ここ数十年にわたる史的変移を探る、これが本稿の目的である。

世代間のコトバの違いに対し、旧世代は新世代のコトバを「乱れ」と片づけてしまいがちだ。だが、乱れとは、消えてゆく、あるいは消えてゆかざるをえないコトバと、生まれてくる、あるいは生まれてこざるをえないコトバとのせめぎ合いである。乱れ、と言うよりは、それは、史的必然性をもった変移である。

発音、語彙、語義、語法、表記などあらゆる範疇での変移の様子を探ってみる。